

平城宮第一次大極殿の成立

はじめに 平城遷都時には第一次大極殿は未完成であった。本稿は、この意外な、しかしあり得べき事実を新出土の木簡によって呈示するものである。

発掘調査の所見によると、第一次大極殿地区のⅠ期は和銅3年(710)の平城遷都当初まで遡るとされ、遷都時に第一次大極殿が既に存在していたことが自明のように扱われてきた。これと同時に問題となるのは、『続日本紀』にみえる和銅3年の元日朝賀が行われた大極殿である(正月壬子朔条)。これについては平城宮の大極殿と考える説もあり(福山敏男氏など)、また遷都時に大極殿が完成していたのならその3ヵ月前にすでに完成していてもおかしくないとする説もあった(新日本古典文学大系『続日本紀』一の補注)が、和銅3年正月の大極殿は藤原宮の大極殿とするのが文献史学の側からの通説であった。そして、平城宮の大極殿はその3ヵ月後の遷都時には完成していたというのが一般的な理解であった。

平城第337次調査整地土出土木簡 2002年度の平城宮第一次大極殿院西樓の発掘調査(平城337次。本書140~152頁参照)では、西樓の柱抜取穴から多数の木簡が出土したが、これとは別に大極殿院南面回廊基壇土の下で整地土から約20点の木簡が出土した。木簡は比較的広く分布するものの調査区西部に特に集中し、しかも完形品が多い。この点は同じ整地土に含まれる古墳時代の土器の細片と対照的で、木簡は整地土にもともと含まれていたのではなく、整地の過程で廃棄されたものと考えられる。

A (表) 伊勢国安農郡^[刀カ]里阿斗部身

(裏) 和銅三年^[三カ]月 200・24・4 051

B (表) 伊勢国安農郡県

(裏) 里人飛鳥戸椅万呂五斗 132・18・4 032

C 長田上郡大^[物カ]里^[三カ] (115)・21・3 039

里制の木簡を多数含み、大宝から慶雲の年紀を記す木簡も1点あるが、その中でも特に注目すべきは、和銅3年3月の年紀をもつ伊勢国安農郡からの荷札木簡Aである。Cにみえる長田上郡(長上郡)は、和銅2年(709)2月に遠江国長田郡を上下二郡に分割して成立した(『続日本紀』同月丁未条)ので、和銅2年2月以降のものであることは間違いない。内容としては、Aには税目も

品目も記されていないが、同じ伊勢国安農郡のBのような木簡も出土しており、Aも米の荷札とみて誤りあるまい。この他確認された荷札は全て米の荷札である。

このような傾向から判断すると、今回整地土から出土した木簡は、平城遷都前後の時期の米、しかも五斗であることに着目すれば恐らく春米の荷札を中心とする木簡を主体としているとみてよい。和銅3年3月の年紀をもつAはけっして特殊な木簡ではなく、この地域の基盤となる整地土には、平城遷都前後の時期の木簡が普遍的に含まれていると理解して大過ないだろう。

和銅3年正月の大極殿 そうであるならば、整地土に含まれる木簡Aの出土によって、少なくともこの部分の大極殿院南面回廊基壇は、和銅3年3月よりも後に地山上に整地を行った上で造営されたことになる。和銅3年3月とは、まさに平城遷都の行われたその月である(『続日本紀』同月辛酉条)。このことは、大極殿院南面回廊は、少なくとも平城遷都の時点では未完成で、造成工事さえ行われていなかったことを意味する。これらの木簡が含まれていた整地土は、断割調査によって調査区の全域に広がることが確認されているから、大極殿院南門も遷都の時点では未完成であったとみてよい。そしてこのことは、次に述べるように和銅3年正月の大極殿が平城宮のものではあり得ないことの重要な証拠となる。

後述する和銅8年の元日朝賀においては、天皇が大極殿に出御して朝賀を受ける際に、入朝している蝦夷と奄美・夜久などの南嶋の人々が、朱雀門外の東西に陣立した左右将軍・騎兵に率いられて朱雀門から宮内に入り方物を貢進している(『続日本紀』霊龜元年正月甲申朔条)。大極殿・朝堂・朱雀門という南北に並ぶ施設を一体として利用した儀式的あり方が読みとれよう。これを参照すると、隼人・蝦夷を参加させて行った和銅3年の元日朝賀も、大極殿から朱雀門までを南北に一体として利用する儀式的構造は基本的に同じで、このような儀式が大極殿院南門周辺が未完成である平城宮で行われたとは到底考えられない。和銅3年正月の元日朝賀は、藤原宮の大極殿におけるものとする従来の解釈は、今回出土した木簡によって益々疑いのないものとなったといえよう(当然のことながら、和銅3年正月16日に踏歌節会が行われた重閣門(『続日本紀』和銅3年正月丁卯条)も、平城宮ではなく藤原宮の門ということになる)。

平城宮第一次大極殿の成立 それでは平城宮第一次大極殿の完成はいつか。『続日本紀』に和銅3年正月の次に大極殿がみえるのは、実に5年後の和銅8年（霊龜元年。715年）の元日朝賀で、大極殿・朝堂・朱雀門を南北に一体として利用した儀式的ありさまが窺えることは前述の通りである。この5年の間に平城宮大極殿は完成したことになるが、この間元日朝賀を中止したとの記事はない。このことは、和銅8年の元日朝賀が実質的な平城宮大極殿の竣工を示す行事であることを強く示唆する。仮にAが和銅3年3月に廃棄されたとしても、完成に4年10カ月を要したならば、最初の元日朝賀は和銅8年となる。遷都から5年の歳月はけっして長くはない。

平城宮の中心建物であるべき大極殿の完成がかくも遅れたのは何故か。この点を考える上で注目されるのが、小澤毅氏の大極殿移建説である（『平城宮中央区大極殿地域の建築平面について』『考古論集』潮見浩先生退官記念論文集1993年）。平城宮の大極殿が藤原宮のそれを移築したものであるならば、和銅3年正月の大極殿が藤原宮のものであることが明らかである以上、平城遷都時に大極殿が完成していたことはけっしてあり得ない。ちなみに後に第一次大極殿を恭仁宮に移築するに際しては、少なくとも2年の歳月を要している（聖武が恭仁宮に入ったのは天平12年末。恭仁宮大極殿の初見は天平15年の元日朝賀）。

東区下層の意義 このように平城宮大極殿の完成は平城遷都時からかなり遅れ、和銅8年（715）の元日朝賀が実質的な竣工であった可能性が極めて高くなった。この事実のもつ意義は、単に第一次大極殿院の問題のみにはとどまらない。平城遷都時には東区の第二次大極殿院・朝堂院下層にも、これに匹敵する掘立柱建物で構成される施設が設けられていた。その正殿が何と呼ばれていたかについては、大安殿説が有力であるものの、なお決着をみていない。それはともかく、第二次朝堂院下層の建物群が朝堂であることについて異論はなく、その正殿である第二次大極殿下層の掘立柱建物は、中央区の大極殿が未完成の状態である和銅年間においては、実質的に平城宮の中心建物として機能したことになる。東区下層のもつ意義を再認識すべきであろう。ただ、これが大極殿の代用とされることはなかった。平城宮大極殿が初めて元日朝賀の会場とされた和銅8年の秋9月、元明天皇は娘の氷高内親王に譲位し、その即位式が大極殿で挙行さ

（裏） 和銅三年□月
「三カ」
（表） 伊勢国安農郡阿□里阿斗部身
「刀カ」



図13 平城第337次調査大極殿院整地土出土「和銅三年」銘木簡

れる。即位にはその舞台装置としての大極殿が是非とも必要だったのであり、このことはまた元正天皇の即位が単なる中継ぎでなく、計画的に行われたものであることについても一定の示唆を与えてくれる。

おわりに 今回の考察の契機となった木簡は、点数的にはわずかであるし、内容的にも何の変哲もない荷札木簡である。しかし、それが、大極殿院回廊基壇土の地盤を形作る整地土という特定の層から出土し、しかもそれが部分的ではなく造成時の整地土として広範囲にわたることのもつ意味はまことに大きい。充分には解明されていない平城宮遷都時の様子、当初の造営過程を考えていく上で、今後貴重な資料となろう。そして、木簡の果たす役割、またその資料的価値を充分に発揮させるために出土状況のもつ意味がいかに大きいのか、つまり木簡が考古遺物であることを改めて認識させてくれたこの木簡出土の意義は、長屋王家・二条大路木簡によって数による木簡の研究が可能になった今日、特に大きなものがある。〔補注〕今回注目した木簡が出土した整地土の広がりを考える上で注目されるのは、平城宮第91次調査出土木簡である（市大樹「平城宮第91次調査出土木簡の再調査」本書39～41頁）。この木簡が出土した地域は内裏外郭西南隅、すなわち第一次大極殿院東南隅に隣接する地域で、平城宮造営時の第一次整地土から出土した一括性の高い遺物である、年紀が和銅2、3年に限られる、米の荷札が多いなど、第337次調査で整地土から出土した木簡と共通点が多い。合わせて参照されたい。（渡辺晃宏）